Network & Footwork

有限会社メディアハウスエイアンドエス Vol.30

•あけましておめでとうございます

A Happy New Year!

東日本大震災で被災した三陸の、かつて同じ場所で行われた祭の様子を写した写真を見ました。白黒の写真には「にぎやかな」という説明文がつけられていましたが、失礼を顧みずに言えば、東京の通勤や繁華街の人混みの様子を見慣れた私の目には、けっしてにぎやかには感じられなかった。

しかし、さらに目を凝らし、そこに確かにいた人々の表情や祭の様子を見ると、そこがどれほど活気にあれている場だったかが理解できました。その活気は、東京の繁華街にけっして劣ることはなく、むしろ失われた二十年を通り過ぎた現在の東京より、ずっと活気を感じます。

同じ思いは、九州を旅し、炭鉱の跡に建てられた記念館を訪れたときに感じました。展示された写真の人々の生活の場、たとえば仕事を終え、風呂に入る人々の様子はとても活気にあふれています。

このように「にぎやか」と「活気にあふれている」は、似ていますが同じではありません。このことは、今後の人口減少社会を生きる私たちに示唆を与えてくれるかもしれません。人が減っていくにつれ、にぎやかになる機会も減っていく。しかし生活の場を活気にあふれるようにすることはできる。かつての人々の生活が写った写真が、そう教えてくれます。

「にぎやか」と「活気にあふれている」が違うように「活動的」と「いきいき」も似てるようで違います。活動的は、文字どおり活発に動いている様子ですが、元気よく動くことができなくても、いきいきすることは可能です。ケガをして活動的にはできないけれど、いきいきとしている人は珍しくありません。つらい闘病生活を送る中で生気にあふれた目をした、いきいきとした表情を見せる人もいます。

「にぎやか」と「活気にあふれている」。「活動的」と「いきいき」。この違いは小さくない。これからの日本で、にぎやかな場で活動的になることは、誰もがかなうことではないでしょう。けれど、活気にあふれる場を作り、そこでいきいきと過ごすことはやさしくはないが、できないことではないと思います。

飯田英明

■高橋の取材ノートから

昨年お世話になりました関係者に心からお礼を申し上げます。本年も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

◎社史・創業者伝

「創業精神の相続」
http://takahashi-akiyo.jp/

○『続・努力と創造の軌跡～65年のあゆみ』

（静光電機工業株式会社　会長　中村脩様著　社長　中村靜弘様　発行　昨年７月刊行）の編集に協力しました。

○その他、非公開ですが10月にはある会社の創業者伝の執筆・編集に協力いたしました。

○進行中

同じく、非公開で50年社史が昨年秋からスタートし、ことし春完成予定で、進行しています。

◎印象に残った書籍

○『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』

(オリバー・ストーン著　大田直子他訳　早川書房)

軍事的には日本への原爆投下はまったく不要だった。あるいは、アメリカの歴代政府は何度も核戦争の危機の瀬戸際政策をとったなど、アメリカ現代史で知られかった対外政策の素顔を、第一次大戦の時代まで遡って、正面から再評価した大作。

○『科学者が人間であること』

(中村桂子著　岩波新書)

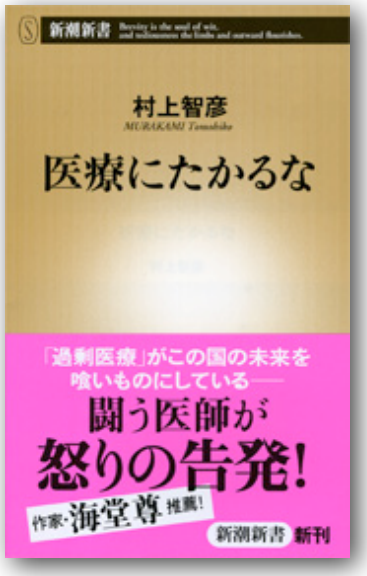
本書は3.11東日本大震災から2年半を経過した昨年7月刊行された問題提起の1冊。著者は「今や元通り、いや以前より先鋭化し、日常や思想などどこ吹く風という雰囲気になっています。それどころか今、「経済成長が重要でありそれを支える科学技術を振興する」という亡霊のような言葉が飛び交っています。ここには人間はいません。経済成長とは具体的にどのようなことで、誰の暮らしがどのように豊かになるのか、幸せになるのかという問いも答えもありません。したがって、科学技術についても、イノベーションという言葉だけしかないところに、大きな予算をつけることが「振興」とされ、その研究や技術開発によって人々の日常がどのようになるのか考えられていません」と警鐘を鳴らしています。

○『医療費にたかるな』

(村上智彦著　新潮新書)

医療従事者だけでなく厚労省や政治家、医師会医などは、医療現場での過剰な薬の投与、過剰な検査の現状が、日本の医療費の赤字の最大の要因であることを理解している。しかし、そこには患者やその家族の側が、立派な病院で検査を受け、多くの薬をもらえる医療が治療効果が高いという錯覚も横たわっていて、解決は容易ではないと著者は分析する。

医師である著者が提案する医療赤字の改革には、地域医療を中心とした住民の健康意識、健康診断の受診、過剰受診・過剰投薬・過剰検査の抑制=病気の予防から始まると説く。



◎印象に残ったステージ

11月下旬行われたビートルズのメンバー、ポールマッカートニーの東京ドーム公演。この時彼は私と同じ71歳である。2時間以上のステージで、休憩無しで、往年のヒットナンバーを熱唱しつづけ、会場に詰めかけた往年の同世代ファンだけでなく、若いファンも魅了し続けた。

◎My Family History

髙橋明紀代 家族の記録　の再開

昨年2月からブログで、My Family History｜髙橋明紀代 家族の記録をスタートした。
http://takahashi-akiyo.jp/family-history/

この「家族の記録」を始める際に、特に母方や父方の従姉妹・従兄弟などから、古い写真や資料の協力があった。

ところが、仕事や妹のケアもあって、第2章で中断してしまった。中断を気にしていたところ、有力な協力者のひとりである2歳年長の従姉妹が昨年亡くなってしまった。今年はどうしても再開して、亡き従姉妹の好意に応えたい。

最後になりましたが、今年もよろしくお願いします。

有限会社メディアハウスエイアンドエス
〒108-0071
東京都港区白金台3丁目16番10-709号
PHONE （03）3449-0785
FAX （03）3449-0736
m-hmail@nifty.com
http://www.m-h.co.jp/